

## 「安政の大地震」

安部 和也

に売られて今此の里に つらい勤めもハヤ十二年 勤め  
ましたよ主水様に 日頃三年こん親したが 今度わし故  
ご扶持もはなれ 又は女房の自害をなさる それに私が  
生存（ながえ）おれば お職女郎の意気地が立たぬ  
死んで意気地を立てねばならぬ 早くそなたも身なりに  
なりて わしが為にと香花頼む 言ふて白糸一ト間へ入  
りて 口の内にて唯一言と涙乍らにノウお安さん 私故  
こそ命を捨ててさぞやお前は無念であるが 死出の山路  
も三途の川も共に妾（わたし）が手を曳きませうと 南  
無といふ声此の世の別れ あまた朋輩皆立寄りて 人に  
情の白糸さんが 主水さん故命を捨てる 残り惜し気に  
朋輩達が 別れ惜しみて歎く（なげ）くも道理 今は主  
水も詮方なさに 忍びひそかに我家に帰り子供二人に譲  
りを置ひて すぐに其のまま一間に入りて 重ねくの  
身の誤りに 我と我が身の一生すつる 子供二人は取り  
残されて 西も東もわきまへ知らぬ 幼な心は哀れなも  
のと あまた情死（しんぢう）もあるとはいへど 義理  
を立ちたり意気地を立てて 心合ふたる三人共に聞くも  
哀れな話でござる ヤンレエー

我が家の菩提寺臨濟宗海宝山崇福寺之過去帳を調査さ  
せてもらっている時、諸記録のなかに安政の大地震に関  
する古文書を発見、早速古文書辞典を片手に独学で解読  
に挑戦、長い日数を要してヤット意味が通じるほどに解  
読できたので発表いたします。

（著者読み下し）

一安政申寅元年十一月五日未ノ下刻 古今未曾有之大地  
震 居宅土蔵等所々倒レ天地震動山鳴海川水あふれ世  
界も滅するかと皆々膽魂を飛し 老若男女押倒踏倒し  
親を呼び子をたずね走り出申候 然ル処別府濱脇之男  
女六七步當山え走り込誠ニ大そうどう 庫裏方丈少し  
のすき間もなく実には芝居の棧敷ニ群集致候様ニ而 夜  
通し念仏或ハ誦經今も世界滅盡するやと心配いたし夜  
を明し候 夫ヨリ六日早天より男子の分はそろそろ引

取候得共 老人子供婦人の分ハ其儘滞留いたし思ひ思ひニ朝飯の仕度いたし寺内も同様 夫より五ツ時分に相成候得ハ男女も若き者ハ追い追ひ帰宅致サレ候主席も小僧を召連別府所々倒家の所ニ見舞ニ参ラレ申候 然ル所何者もしれず嶽山崩れ山潮出 沖よりハ津波来ルと町々觸廻ル者はあり 夫よりたれいふとなく夫山潮出るわ津波の来ルわと一統さわぎ立 又候取物も取あへず残ラズ拙寺境内菜園築山寺内ハ申ニ及バズ一面ニ押登り薙お敷 或ハ土間ニ蒲団をしき又ハ渋紙お敷思ひ思ひニ陣取いたし 其夜も柴津山が崩れ出る津波が来ル哉と夜通し案し候得とも何事もなく無事七日丑之下刻頃すこし雨降候得ハ先々昨日ヨリ昨夜迄何事なく無事 今朝之雨にていよいよ地震も是切と相見 一先安心事ニ思ひ六歩方早朝ニ引取寺内ニ残り候者も食事ともいたし 主席も剃髪其外遊女子供并ニ若き女中とも思ひ思ひニ髪結なといたし雑談最中 巳之上刻又候大地震 山川震動五日之地震に十倍 誠ニ膽魂も失し 親子兄弟夫婦離散拙寺ニ又々逃げ来るもあり 朝見八幡宮へにけ行者有 船にて向地ニ逃げ行く

者もあり拙寺ニ逃げ来る者とも雪踏かたし下駄かたし又ハわらんじ 何れも土足其儘奥の上板敷の差別なく女子供ハなきさげび言語絶スル有様 実ニ前代未聞大そふどふ 別府之方ハ所々家倒又は六七分倒れ 或ハ壁落井戸水あふれ大地破れ下よりすな泥おふき出し候得とも 濱脇之方ハ仕合と左程之義もコレ無ク かへ土壺ツ落損し候家壺軒もコレ無クすこしハ案心の事ニ候 然ル所拙寺ニ走り込候人々 追々ニ菜園築山其外戎屋田地ヨリ歳之神大明神様社内ヨリ下墓所迄思ひ思ひニかり小家をこしらへ申候 小家数凡八九十軒計出来 拙寺方丈ヨリ庫司之内其儘住居いたし候者も多分之事ニ候 しかる所少々宛之地震ハ昼夜ニ捨六七度宛動き申候安心成ラザル事ニ候 折悪く疱瘡流行ニ而小児病中之者小家之中ニ平臥コレ有リ候者七八人も相果申候 誠ニあわれ至極之事とも也 去リ乍ラ追々居なれ候へハ酒さかな蕎麦菓子之類売廻り日々賑ハ敷事ニ候 十二三日頃ヨリ追々帰宅いたされ候得共残ラズ引取ニ相成候事ハ十七日ニ候 併シ乍ラ諸道具夜具ナドハ極月迄も拙寺ニ預り置申候 右様大勢走り込人勢の

つよき「」 拙寺ハ瓦壺ツ落ずかへ壺ケ所破損  
いたさず無事実ニ神仏の加護力なり 去リ乍ラ兩村之  
内ニ而ハ人壺人も損シ申サズ仕合の事也 府内乙津鶴  
崎邊ハ余程人もそんな候よしニ承リ申候 右十日余り  
の事 中々筆紙ニ盡シ難シ方一相記置也

二安政五戊午年五月廿五日晴天 辰之中刻山谷鳴動シ大  
地震三日四日引続き来ル 然ル処諸方大混雜別而別府  
之方動之強く候へハ 皆々拙寺境内始諸方へにげ行そ  
ふぞふ敷事ニ候 拙寺菜園ニ小屋掛ケ出来 尤も別府  
米屋清左衛門 府内屋太郎兵衛 日野屋玄八ハ濱脇庄  
屋其外向ば田邊之者多分小屋掛ケいたし候 若松屋隠  
居是ハ天口海亭ニ寄寓 其余性名相記し申サズ候 同  
日未之刻頃夕立雨来内外大混雜 其後半晴半曇 辰之  
刻ヨリ相替ラズ時々山谷鳴動皆々大心配 先年寅年大  
地震ニ相替ラズ天災恐敷事候 夜分寺内雨戸明けはな  
し守夜専一二申付候 夜分雨晴レ候得共地鳴ハ折々相  
休マズ誠ニ不安心之事ニ御座候 廿六日曇天相替ラズ  
地震動仕候 夜分戌之中刻大壺ツ来皆々驚動 廿七日

晴天卯之上刻大地震壺ツ来 巳之中刻又候大壺ツ来  
夫ヨリ皆々大そふとふ追々荷物ナト寺内え持込小屋掛  
ケ出来いたし候 其後地震も段々軽く相成晦日小屋引  
拂ニ相成申候 去リ乍ラ少し宛折々鳴動相休マズ候ニ  
付 六月五日より朝見八幡宮ニおゐて鶴見権現へ祈禱  
神楽修行 同七日鶴見嶽於權現社祈禱滿散 右二付六  
ケ村寺院も萬民安穩之ため於社中読經祈願致呉候様村  
方庄屋方ヨリ頼ミコレ有り候付 七日早朝ヨリ暑中厭  
わず登山 理趣分壺座真読祈念いたし候 尤も弁当  
銘々持来先方ニ而為神酒壺杯コレ有り候 右之義一統  
俗説ニ 此度之地震を鶴見嶽之荒と申候為祈願如此  
其感應か其ヨリ鳴動不致候

古文書解読

## 明治初年の農民蜂起

御一新新運上御断り



農民の「御一新」への最大の期待は、年貢の軽減であ